

中道改革連合、解体を決定！衆院統一会派「中道」結成へ

中道改革連合は9月9日、国会内で臨時の常任幹事会を開き、中道の解体に伴う「新たな形態」を正式決定しました。立憲民主党出身者は離党して新党を立ち上げ、公明党出身者は離党して公明に戻る。保守色の強い高市早苗政権に対抗する「中道勢力のかたまり」を目指し、中道、立憲系新党、公明の3党が衆院で統一会派を結成し、野党第1会派の立場を維持する考えです。

衆院の統一会派名は「中道」とするとしています。また、立憲系新党の党名や執行部体制は早急に詰める予定。現在、中道の所属衆院議員は立憲系21人、公明系28人の計49人。立憲系1人が中道に残ること

で中道を当面存続させ、財務関係などの残務処理が完了した段階で、年内にも中道を解散する方針。立憲系新党、立憲、公明の3党は国会活動や選挙などで協力し、中道勢力の拡大を目指すとしています。

中道改革連合は立憲と公明の衆院議員が1月に結成し、参院議員や地方議員も中道に合流することを前提としていました。しかし、2月の衆院選での惨敗により、合流の機運は一気にしぼみ、政策のすり合わせも進みませんでした。

8月に入り、立憲が合流の見送りを決定。中道と公明も2党合流を断念したことで、中道の事実上の解体が確実になっていました。

また、これを踏まえて、立憲民主党田名部匡代幹事長は同日の記者会見で、中道改革連合が新たな党運営形態を決めたことを受け、その決断を尊重しつつ、今後も立憲民主党・中道改革連合・公明党を含む各党との連携を模索し、「大きなかたまり」をつくることを目指す考えを示しました。

これまで3党が国会対応を通じて築いてきた信頼関係を重視しながら、参院で与野党が拮抗する状況も踏まえ、3党に限らず幅広い協力を進める方針を強調しました。



県内反応

中道改革連合の党分裂と、立憲民主、公明両党出身議員の分派が正式に決まった9日、中道で2月の衆院選を戦った立民出身の県内3氏は、新党の動向や支持者の意見を踏まえ、入党するかどうか判断する意向を示した。立民県連の田名部匡代代表は、中道3氏と連携したい考えを表明。一方、県内関係者からは、新党や衆院統一会派の先行きについて「不安」「未知数」と懸念の声も聞かれた。

3区の岡田華子氏は「分裂は本当に残念。半年以上一緒にやってきた仲間と別れるのは寂しい」と率直に語る。その上で「党の理念に共感して中道を選んだ。新党の基本政策や綱領が、中道の掲げているものと同じか分からない。今の時点で新党にいくという決断はできない」と話した。

1区の升田世喜男氏は、立民系の出身議員が結成する新党の形が決まっていなため「正直、先が見えない不安はある」とこぼす。自身の新党入りの判断は「（立民出身の）現職衆院議員が全員合流するかどうか分からない。しばらく状況を見極める」とする。

2区の松尾和彦氏は「こ

中道3氏 新党推移見極め 連携呼びかけへ

2026/9/10 東奥日報

これまで検討してきた中から出せた結果としては良かったのではないかと冷静に受け止めた。新党入党については「現段階では明言できない」としつつ、「（所属などが）ばらばらの状態

では選挙も戦えない。一緒にできるかどうか、今後の推移を見守っていく」との姿勢を示した。

立民の田名部県連代表は、次回の県連幹事会で、中道3氏にオブザーバーとして参加してもらうと説明。従来から3氏との意見交換を重ねてきたとして、「これまでの経緯を共有し、県内で力を合わせていこう」ということは話したい」と述べた。

公明党県本部の夏坂修代代表は、中道が衆院選で1千万票超の比例票を獲得したことを引き合いに、「有権者の期待に応える責任を果たせなくなる。ただただ残念という一言に尽きる」と肩を落とす。立民系と公明系の議員が衆院で組む統一会派にも「どこまで政権と対峙できるか未知数」と不透明感を口にした。

（本紙取材班）



青森市で街頭活動する升田氏（9日午前8時50分）

むつ中間貯蔵施設「事業者間連携」（全国共有化）を許さない！

『核の中間貯蔵はいらない！下北の会』がむつ市へ申し入れと公開質問状を提出

8月7日にむつ市役所を訪れた使用済みの核燃料の搬出元の東京電力、日本原子力発電の幹部らに山本市長は先に両社から示されていた5,000トンに満たない搬入計画について「事業者間連携」も含めて再検討してほしいと述べていました。

このことはまさに2005年の立地協定や2024年の安全協定に明確に違反する越権行為であるとして「核の中間貯蔵はいらない！下北の会」は県内の脱原発市民団体を網羅する「核のゴミから未来を守る青森県民

の会」と共同でむつ市に対して申し入れと公開質問状を提出しました。

9月4日に下北の会の野坂庸子代表以下杉浦弘樹むつ市議を含む6名がむつ市を訪れ、小笠原企画政策部長に手交しました。

小笠原部長は「事業者連携」を含む搬入計画を認めるとは言うておらず、この件でむつ市は何一つ決めていないことを強調していますが、申し入れ内容はきちんと市長にも伝えると述べるにとどまりました。

【公開質問状の要約】

- ① いわゆる「事業者間連携」は立地協定（05/10/19）や安全協定（24/8/9）に反することへの認識
- ② 上記の協定は青森県も当事者であり、むつ市だけの判断で協定を超えるような協議ができるのか
- ③ 事業者との話し合いでは「事業者間連携」について不足分の500トンに限定しているのか
- ④ 事業者に対し貯蔵見込み不足の500トンの収入減対策を事業者間連携以外の方策による充足案を提起しているのか
- ⑤ 県知事が現時点で本年度のむつ搬入を留保しているにも関わらず、なぜ現段階で事業者との協議を進めるのか
- ⑥ 報道では今回の市長の意思表示が知事から実質的な権限を委譲されたように報じられているが、それはいつ、どのような場面で、どのような内容だったのか
- ⑦ 8/8の新聞報道された県環境エネルギー部長の発言内容について承知しているのかどうか
- ⑧ 貴職が考える最終判断に至るスケジュールが知りたい
- ⑨ 貴職が「事業者間連携」の最終判断には知事との協議、確認を行なうのかどうか
- ⑩ 「事業者間連携」について知事が認めない場合の貴職としての対応が知りたい
- ⑪ もし「事業者間連携」を行うとした場合、立地協定の変更をどのような手順で行う予定か伺いたい

「事業者間連携」 容認撤回求める

むつ市役所
反核燃2団体、市へ

むつ市の使用済み核燃料中間貯蔵施設を電力各社で共同利用する「事業者間連携」を巡り、山本知也市長が事実上容認する判断をしたことを受け、青森県内の反核燃2団体は4日、市に対し東京電力ホールディングス、日本原子力発電の2社での利用を定めた、当初

の立地協定に反するとして容認撤回を申し入れた。市に求めたのは「核のゴミから未来を守る青森県民の会」と「核の中間貯蔵はいらない！下北の会」。市役所を訪れた下北の会の野坂庸子代表が、同市の小笠原洋一政策推進部長に質問状を手渡した。

野坂代表は中間貯蔵施設に反対との前提を示した上で「市長が率先して（事業者間連携を）容認するとは、到底受け入れられない」と強調した。これに対し小笠原部長は「質問状には適切に対処し、市長に伝える」と述べるにとどめた。（林泰輔）



むつ市の小笠原洋一政策推進部長（右）に質問状を手渡す「核の中間貯蔵はいらない！下北の会」の野坂庸子代表（左）4日

むつ市議会特別委員会開催 山本市長は「事業者間連携」を容認していないと述べる

9月9日に開催されたむつ市議会「中間貯蔵施設調査特別委員会」で山本市長は東京電力や日本原子力発電以外の電力会社の燃料を搬入する「事業者間連携」について、山本知也市長は「その方向性を示したり、容認したりしていない。安全を最優先にしながら地域の発展につながるよう取り組みたい」と強調、立地協定などでは、東電や日本原電ではない電力会社からの燃料の搬入は想定されていない。だが東電などは2025年12月、中長期の搬入量が当初想定した5千トンを割り込んで最大4500トンとなる見通しを明らかにし、事業者間連携をむつ市などに提案した。むつ市議会は26年3月、安定した収収確保を狙いに事業

者間連携の具体的検討を求めるむつ商工会議所の請願を採択。こうした動きなどを踏まえ、山本市長は8月、リサイクル燃料貯蔵(RFS)、東電や日本原電に対し、事業者間連携を含めた中長期的な搬入計画を示すよう、3社との面会で要請していた。

この日の特別委で、議員の1人は「5千トンに達しない理由がはっきりしていない。立地協をほごにしてまで協力しないといけいいのか」「事業者間連携を進めるのであれば、地域貢献を拡大する機会とし捉え、事業者に力強く働きかけていくべきではないか」といった発言もあった。

※本記事は朝日新聞9/5版より抜粋しました。

むつ市議会第 269 回定例会が開催されました 一般質問には 11 名が登壇

今回の定例会は国民スポーツ大会の本県開催ということで例年より前倒しで8月14日から9月9日まで開催されました。一般質問は8月24、26、27日の3日間で計 11 名の議員が登壇しました。杉浦弘樹市議は24日に登壇し、①陸奥湾の養殖事業の現状と

今後の対策(下記新聞記事参照)、②むつ・川内・脇野沢の3漁協の合併協議の状況、③陸奥湾フェリー「かけはし」が就航したことによる観光産業の新たな施策、の3点を質問しました。



マガキの試験養殖 県と連携 9月開始

【各議員の一般質問の状況】

むつ市は26日の市議会一般質問で、県と連携して9月、マガキの試験養殖を始めることを明らかにした。市議員(むつの風)に答えた。

の高水温によるホタテの大量死を受け、新たな源としての実現可能。川内町漁協が、県水産振興課と、養殖に使用するカキの種苗は6万個で、2029年11月まで行う。養殖にかかる経費は県の補助金を活用する。

杉浦議員は、むつ市漁協や脇野沢村漁協が試験養殖に参入する意思を示した場合同様に質問。一戸義則農林水産部長は、区画漁業権などの関係で、まずは県に相談する必要があるとした上で「具体的な要望があれば、国や県の支援制度や市の財政状況などを総合的に勘案し判断したい」と答えた。(目時壮太)

2026/8/27 東奥日報

佐々木隆徳議員は 中間貯蔵の共用化 を取り上げました

同議員は8月7日の市長が事業者への伝達した内容について質問しました。

市長は答弁では現時点で事業者間連携について認めたつもりはないと釈明し、結論を誘導するものではないとしながらも、3月の知事判断から大きな環境変化があったと発言しました。

2026/8/27 東奥日報→

中間貯蔵の事業者拡大 市長「容認していない」

むつ市議会 一般質問

むつ市議会は26日、一般質問を行った。市が使用済み核燃料中間貯蔵施設(同市)に燃料を搬入する電力会社を拡大する事業者間連携の検討を容認したことについて、山本知也市長は「事業者には中長期の搬入搬出計画の提示を認めることを伝達した」と述べ、現時点で拡大自体を容認したものではない、との認識を示した。佐々木隆徳議員(陸奥未来)の質問に答えた。

山本市長は7日、施設の運営に関わる東京電力ホールディングス、日本原子力発電などに対し、電力他社の核燃料を含めて計5千トンの搬入計画を改めて示すよう求めた。事業者に伝達した内容を改めて確認したいとの佐々木議員の問いに、山本市長は「市として、連携の方向性を示したり、結論を誘導するものではない」と述べ、事業者間連携の容認を重ねて否定した。山本市長は3月に宮下宗一郎知事が核燃料の新規搬入を認めない姿勢を示して以降、事業者間連携への判断を保留していた。今回の判断に至った理由を問われ、再処理工場の設計・工事計画認可(設工認)の説明が一通り終わり、審査が前進したこと、国が同工場の工程管理に関与すると表明したことを挙げ「知事が3月に判断した状況から、大きな変化があったと受け止めている」と述べた。一般質問は4人が登壇した。(目時壮太)



◇佐藤武議員(無所属) 休止中の自動運転バス実証運行について来年度の予定を示す。

▷山本市長 国の補助制度の内容を見極めなければならない。バスの購入ではなく、レンタルで補助をもらえるのかも含めて、持続可能な事業となるかを地元バス事業者と連携して検討し、判断する。



◇住吉年広議員(公明・自由) 罹災(りさい) 証明書交付の迅速化でデジタル技術活用への考えは。

▷松谷勇総務部長 証明書の発行に係る事務処理では先だって被害認定調査を行うなど膨大な時間を要する。システム導入は効率化に有効な手段であり、費用対効果などを調査、研究したい。



◇工藤祥子議員(無所属) 市歴史文化資料館の整備の考えは。

▷阿部謙一教育長 現在、市が所蔵する文化財を観光客向けに公開するに至っていない。現状では建設に着手する段階にないが、まずは資料の整理と保存環境の把握を進め、効果的な展示の在り方を検討する必要がある。



◇浅利竹二郎議員(自民ク) 歴史教育と郷土愛醸成の取り組みを示す。

▷阿部教育長 小、中学校の社会科の授業では地域の歴史を学ぶ機会がある。総合的な学習の時間には下北ジオパークの学習と関連させて、地域の歴史を探究する例もある。地域の祭りへの積極的な参加も促している。



◇佐々木隆徳議員(陸奥未来) 観光遊覧船「夢の平成号」の処分の行方は。



▷福山洋司商工観光部長 船舶売買業者から聞き取り調査を実施し、関係機関や部局と売却の可能性を探っている。売却先が見つからなかった場合の処分費用も検討している。



◇佐賀英生議員(市誠ク) 薬研地域の活性化に向けた取り組みは。



▷福山商工観光部長 薬研野営場は口コミで設備や利用料金が高評価。市のホームページでは野営場や溪流、温泉を一連の観光体験エリアとして見てもらえるよう掲載方法を検討する。



◇高橋征志議員(無所属) (仮称)下北西部風力発電事業への意見書の内容は。



▷石橋秀治市民生活部長 林野庁への説明、理解を得て、ニホンザルなど生態系への影響について専門家による評価を得ることなどをまとめて提出した。



◇杉浦弘樹議員(むつの風) むつ市、川内町、脇野沢村の3漁協合併協議の現状は。



▷一戸農林水産部長 24年度に県内各漁協役員らを集めた会議で、合併すべきとの認識を共有。だが、陸奥湾産ホタテガイの被害対応で議論は停滞している。



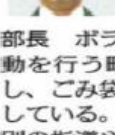
◇井田茂樹議員(自民ク) 市内での海洋STEAM学習の取り組みを示す。



▷阿部教育長 JAMSTECむつ研究所の協力を得て、関根小の児童が下北の複数の海岸から砂を採取して地点ごとの違いを比較し、海岸に漂着したごみの実態を調査してきた。



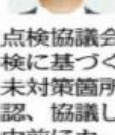
◇村中浩明議員(陸奥未来) 環境美化活動推進へ地域との連携方法は。



▷石橋秀治市民生活部長 ボランティアによる清掃活動を行う町内会などの団体に対し、ごみ袋や土のう袋を無料配布している。依頼があれば、ごみ分別の指導やごみ処理場への搬入に関して助言している。



◇櫻田秀夫議員(公明・自由) 通学路の安全性の検証状況を示す。



▷阿部教育長 安全点検協議会を年1回行い、合同点検に基づく危険箇所の改善状況や未対策箇所の課題を関係機関と確認、協議している。本年度も大平中前にカーブミラーを設置するなど対応している。

フォーラム青森、立憲民主などの合流問題で全体集会を開催しました

8月30日、フォーラム青森は、青森市の「アピオ青森」で中央フォーラムの伊藤剛事務局長を招き、20名の会員が『合流問題など政治情勢』などについて報告、講演を受けた後、意見交換を行ないました。これは先のフォーラム青森の定期総会に中央フォーラムスタッフがスケジュールの都合で出席できなかったためにあらためて開催されたものです。

伊藤事務局長は8月17日に開いた全国自治体議員団総会での合流問題意見交換会でも積極的に合流促進の意見はなかったとしながらも、一部の県組織からは「反動的な高市政権に対抗するためには、中道に合流したうえで中道を変えていくことが先決」とした声があったことなどが報告されました。

また、後半は「高市政権と対峙するために」とした自身の分析による経済情勢を披瀝しました。

講演後の意見交換会では①公党が約束して結成した政党に合流しないとはどういうことか、②結成してすぐ分かれるとはどういうことか、③公明党が比例区で優遇されて全員当選、こうした中央の情勢が理解できない、などと言った意見、④中道の今日の動きを見れば馴染むことはできない、あらためて分離してすっきりしてほしい、などの発言がありました。



《講演要旨・情勢分析「高市政権と対峙するために」》

(1) 必要なのは「責任ある積極財政」？

- 安倍政権時代の「異次元緩和」は積極財政ではなかったのか？

…新規国債の8割を市中銀行経由で日銀が買い取る財政ファイナンス（大量発行した国債の低金利を国が保障する、ありえない政策）

…世界の中央銀行で唯一、中央銀行が株式を購入し、株式市場に介入。上場投資信託を年3兆円買い取り（現在は中止）、保有残高は37兆円ベース

- 積極財政は不況時にデフレ脱却・将来の需要を棄贅しないために実施

…インフレ時の積極財政は物価高を助長する

(2) 変えるべきは経済の構造そのもの

- 際立つ日本の労働者の低賃金
…日本の労働者の平均年収はOECD平均よりも11,700ドル（現在のレートで約187万円）低く、韓国労働者の年収よりも1,500ドル（24万円）低い。米国労働者の年収の6割以下で円換算では536万円も低い
- 先進国で日本だけが実質賃金が上がっていない
- 結果としての歪な経済構造
…この15年間、売上高は横ばい（1.22倍）なのに経常利益（2.62倍）、配当金（3.82倍）、利益剰余金（6.33倍）と、モノが売れていないのに利益は増え、企業内に資金が蓄積し、株主配当も増えた
…他方、賃金は1.17倍しか上がらなかった（しかも名目で）。変えるべきはこの経済構造
…現在、年間出生者数が70万人を切るかどうかといった少子化が進行。将来の労働力が減少するのは、労働力の再生産費たる賃金が価値以下に切り下げられている証左

- 連合集計で26春闘は5.02%の賃上げだが…
…一方で加盟組合数7,884組合中、定昇含む賃上げ要求ができた組合数は5,342（68%）にとどまる。賃上げは波及しているのか？ 賃金格差は広がっていないか？
- (3) 必要なのは消費税減税なのか
- 異様に低い租税負担率
…所得課税はわずか9%で米国よりも低い。社会保障負担19.2%は所得課税の倍以上
- しかも所得税納税者の8割が税率10%以下！こんな国はない
- 結果、税制は殆ど所得再分配機能を発揮していない
…社会保障制度による所得再分配効果が大きいのは負担ゼロで給付がされる年金の第3号被保険者の制度によるものと推測
- 税財政の改革のあり様は
…税によって支えあう社会の構築
…消費税制はその制度の枠内で逆進性解消は不可能。消費税率引き下げは高額所得者ほど有利に！
…基幹税は所得税、変えるべきは①所得税制度②税と社会保険料の負担の在り方。誰もが支払い、低額所得者にはサービスと現金の給付
…付言すると103万円の壁廃止等、課税最低限の引き上げも、累進課税制度の下では高額所得者ほど恩恵が増えてしまう。
…食料品消費税率をゼロにした場合の世帯年収別の恩恵度は高額所得者ほど有利になる
…「手取りを増やす」＝「福祉・公共サービスの削減」＝自己責任の強化に向かう社会。どんな社会を目指すかは、何によって、どう支えあうかのビジョンが必ず問われる

8月22日、第33回浮島丸出港追悼集会在開催されました

不戦の決意をあらたに献花、学習会を実施

浮島丸事件 次世代に

むつで犠牲者追悼集会

終戦直後、下北地域で労働に従事した朝鮮人らに乗せた旧海軍の輸送船が京都府の舞鶴港で爆発・沈没し、500人超が犠牲になった「浮島丸事件」の追悼集会が22日、むつ市中央公民館で開かれた。

市民団体「浮島丸下北の会」が、大湊港を出港した8月22日に合わせて毎年開いており、今年で33回目。県内各地から15人が出席



浮島丸事件の犠牲者追悼集会で献花し手を合わせる参加者＝22日午後、むつ市中央公民館

し、献花台に花を手向け、手を合わせて犠牲者を悼んだ。浮島丸殉難者を追悼する会（京都府）などからもメッセージが寄せられ、会場で読み上げられた。

下北の会の村上準一会長（79）は「次世代の子どもたちに、私たちが語り部として事件のことを伝えていきたい」と語った。

浮島丸は1945年8月22日、古里に帰る朝鮮人労働者やその家族、乗組員ら約3700人を乗せて大湊港を出港。釜山港に向かう途中の24日、舞鶴港で爆沈した。日本政府は朝鮮人524人、乗組員25人が死亡し、米軍の機雷に触れたことが原因と発表している。

2024年、政府が韓国へ乗船者名簿などを一部提供したが、犠牲者の遺骨は東京都目黒区の祐天寺に280柱が安置され、その返還が課題となっている。（目時壮大）

←2026/8/24 東奥日報 ↑2026/8/23 東奥日報

戦後81年、未だ多くの謎を残す殉難事件

猛暑の8月22日、むつ市公民館で恒例の追悼集会が開催されました。集会は栗橋事務局員の司会で始まり、村上会長のあいさつ、むつ市長のメッセージ読み上げ、I 女性会議青森県支部高沢議長（野辺地町議）、吉田むつ市原水協事務局長のあいさつがありました。また、「浮島丸殉難者を追悼する会」（舞鶴市）、「朝鮮人犠牲者追悼会」（東京都）からのメッセージが紹介されました。その後、参加者による献花を行いました。

第2部の学習会では地元の山本隆悦氏（県近代文学館資料調査員）から「浮島丸事件の諸問題に生涯をかけた鳴海健太郎氏」と題した講演を行いました。

鳴海氏は『真実・真相はひとつ』として日本政府が本腰を入れて真相を究明する必要があるとして、政府が公『触雷説』と断定するなら、なおのこと、多角的見地や資料を駆使して究明すべきと主張していました。とりわけ歴史の真実を追及することこそ、朝鮮民族との友好の証と訴えていたことなどが紹介されました。

一方、浮島丸が爆発・沈没した舞鶴港に「殉難の碑公園」では例年8月24日、追悼集会があり、こちらでは厚労大臣のメッセージ、京都府知事や舞鶴市長の献花もありました。



舞鶴市「殉難の碑公園」での追悼集会の様子

「戦争繰り返さない決意」

京都浮島丸事件81年で追悼

太平洋戦争終結直後、本

つした。

県から帰郷する朝鮮人労働者らに乗せた旧海軍の輸送船が、京都府の舞鶴港で爆発・沈没し500人以上が死亡した「浮島丸事件」から24日で81年となった。爆沈地点に近い同府舞鶴市の公園にある「殉難の碑」前で追悼集会があり、主催者は「追悼を続けることは戦争の過ちを繰り返さない決意も込めている」とあいさ

つた。同会は2025年から、真相究明のため事件目撃者の証言を集め、11人分を「報告集」としてまとめた。

追悼の歌を斉唱する京都朝鮮中高級学校の生徒ら＝24日午前、京都府舞鶴市

集会には、京都府知事や舞鶴市長名での献花があり、厚生労働相もメッセージを寄せた。

下北の戦争遺産 あらたな情報が寄せられたことが報じられました

風間浦の「震洋」格納穴

「魚雷射堡」だった

山田さん(大間出身)が情報提供



山田 勝仁さん

今回の連載に対し、読者から複数の情報提供をいただいた。その中で、大間町出身で埼玉県越谷市在住の演劇ジャーナリスト・山田勝仁さん(71)からは、地元で有人の特攻艇「震洋」の格納壕跡として知られ、連載でも紹介した風間浦村甲地区の穴は、陸上から無人の魚雷を発射して敵艦艇を攻撃するための発射基地「魚雷射堡」だったと

いう情報が寄せられた。甲地区の海岸に掘られた穴は「下北の地域文化研究所」代表の斎藤治氏(故人)が調査し、同研究所の冊子で発表して以降、地元では震洋の格納壕として広く認知されていた。山田さんは2015年、斎藤氏と現地へ赴いて調査。その様子をインターネット上で公開したところ、県外の軍事に詳しい人から「魚雷射堡ではないか」との指摘を受けた。

根拠は1971年出版の「戦史叢書 北東方面陸軍作戦2」千島・樺太・北海道の防衛(防衛庁防衛研究所戦史室著、朝雲新聞社発行)。同書に記載の地図では、甲地区と書かれてはいないものの、位置関係から同地区に魚雷射堡があったと推察されるという。山田さんは「下北半島は(軍部に)重視されていた。工事も秘密裏に行われ、地元の人にもほとんど何をしてい

山田さんは2015年、斎藤氏と現地へ赴いて調査。その様子をインターネット上で公開したところ、県外の軍事に詳しい人から「魚雷射堡ではないか」との指摘を受けた。根拠は1971年出版の「戦史叢書 北東方面陸軍作戦2」千島・樺太・北海道の防衛(防衛庁防衛研究所戦史室著、朝雲新聞社発行)。同書に記載の地図では、甲地区と書かれてはいないものの、位置関係から同地区に魚雷射堡があったと推察されるという。山田さんは「下北半島は(軍部に)重視されていた。工事も秘密裏に行われ、地元の人にもほとんど何をしてい



「戦史叢書 北東方面陸軍作戦2」千島・樺太・北海道の防衛」に掲載されている地図。下北半島の桑畑と大畑の間に魚雷射堡の印がある(赤い矢印部分)

鬼才・川島雄三監督を描いた小説が映画化！完成が待たれます



山本市長(手前左)に「生きいそぎの記」の映画化について語る保坂監督(右)

川島雄三は1944年公開の「還つて来た男」で監督デビュー。45歳で急逝するまで「洲崎パラダイス赤信号」(56年)「幕末太陽傳」(57年)などを残した。藤本義一は大学在学中から放送作家として活躍し、藤本が晩年の川島と過ごし

直木賞作家・藤本義一(1933〜2012年)が師と仰いだむつ市出身の映画監督・川島雄三(1918〜63年)をモデルに書き上げた小説「生きいそぎの記」の映画化を目指し、関係者が活動を始めている。31日、製作プロジェクトのメンバーが同市役所を訪れ「川島と藤本の出会いから別れまでの感情のせめぎ合いを表現したい」と意気込みを語った。

師弟の日々 映画に

むつ製作メンバー意気込み

川島雄三モデル 藤本義一の小説

た中で感じた芸術的感性や、その裏の孤独に魅了されていくさまを描いた。同日、脚本を兼任する保坂延彦監督、藤本の長女・中田有子さん、プロデューサーの国枝秀美さんが市役所を訪問し山本知也市長、阿部謙一教育長らと面会した。保坂監督は「原作小説は、2人の脚本作りに対する熱い気持ちや物作りの原点について教えてくれる。映画を作ることで、それをもう一度確かめたい」と製作への意欲を語った。

配役については「川島監督はニヒルな性格だと思っていて、演じられる役者は何人か『妄想』している」とにやりと笑った。クラシックインは2027年秋ごろからで、同市など下北半島で撮影するとい

2007年4月、「輝け！下北の女たち」は発行されました。そこには、丹念な取材によって生命を吹き込まれ、いきいきと甦った、戦前から現在にいたる下北地方の女性たちの「人生」そのものがありました。今回から数回にわたり、その一部をご紹介します。

【著者・斎藤作治氏プロフィール】

1930年むつ市生まれ。その後、下北郡大畑町で幼少時代を過ごす。明治大学卒業後37年間、むつ・下北で教鞭をとる。1993年「下北の地域研究所」創設、2016年逝去。

青森県男女共同参画センター情報誌が著者にインタビューした際の記事です。

田名部高校に勤務していた時に、生徒会新聞に月1回「下北のひとたち」という連載記事を執筆していました。そのとき、「男」「女」を交互に書こうと思っていたのですが、「女のひと」を書こうとすると、取材相手を見つけるのにすごく苦労したのです。なぜかと言うと、男性と違って、女性の職業は助産師、看護師など、非常に限定されたものしかなかったからです。それは、女のひとに職業を選ぶ自由がなかったということです。私は、女性への職業差別や、女性の社会進出をはばむ社会の仕組みに焦点をあてたいと思い、この本を書きました。（2009年3月号より）



第1回【むつ市 赤羽チャさん：裸馬に乗った産婆さん】

カッコイイ！

裸馬で駆けまわった助産婦

第一田名部小学校の階段下にある赤羽チャさん宅で、とっても楽しく嬉しい話を聞きました。昭和六十年九月のことでした。

「馬に乗ってお産の仕事をして聞いてきました、それ本当ですか？」「ほんとに、ほんとの話ですよ」（笑い）

五十年以上も助産婦の仕事をしていて今も現役だという女傑、赤羽チャさん（当時七十四才）に会うのは大変だなあとサクジさんもやや緊張していたが、ゆったりして、なんの気取りもない最初の一言で、すっかり落ち着いてしまった。

「なんでまた、馬に乗って歩いたんですか？また、どこで馬っこ覚えてんですか？」

「随分また先生という人種は難しいことを一度に聞くもんですね（笑い）。急がねで、ゆっくり一つずついきましょう。私の生まれは岩手県の盛岡なんです。岩手医大の看護科を卒業して、なぜだったか忘れましたが青森の県立病院に勤務していたんですよ。恐らく、あまり気が強いので、ぼられたんでしょうね（笑い）。これが、田名部

に来る運命となったのです」「まるで、活動写真（映画）の弁士のような口調になってきましたね」（笑い）

「その時、県病の患者だった赤羽のおじいさんが、太くて顔の悪い（笑い）私のどこが気に入ったのか、〈息子の嫁になって下北の田名部に来てくれないか〉と何回も言うので、その熱心さにほだされて〈田名部へ行って嫁さんになります〉って返事したんですよ」

「ちょっと待って下さいよ。これまでの話だと本人の意思が入っていないようですが？」「そんなものは必要がないんですよ（笑い）。親が決めればいいんですよ。その頃はお互いに顔も知らないで結婚したんですよ」「それで、うまくいくもんですかね」「いくんでなく、いげるんですよ。結婚式の日、初めてお婿さんの顔を見たら割といい顔をしていたので、〈もうけたぞっ〉と思いました」（笑い）。

赤羽さんは明治四十四年、岩手県盛岡市に生まれましたが、お父さんが県営の種畜場に勤務して、滝沢村に居たので両親と離れて、おじいちゃん、おばあちゃんと盛岡に住んでいました。その頃の赤

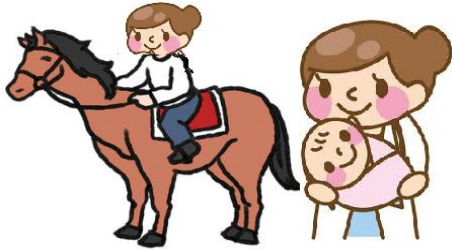
羽さんの一番の楽しみは、日曜日に滝沢村へ行って馬に乗ることでした。「いくつぐらいだったんですか」「たしか七才か八才だった、と思いますね。なにしろ馬って大きいもんだから、はじめは、大人の人にさせてもらったんですよ。ところが、そのうちに馬のヒザを足場にしてヒラリと乗ることをおぼえ、たずなよりもたて髪の方が安定するもんだから、それにつかまって乗り回していました」

「カッコいい！まるでサーカスカ曲馬団の花形少女みたいだったんですね」（爆笑）。

「これが、後で下北へ来て大いに役立ったんですよ。当時の下北は汽車はもちろんバスも通ってなかったんで、夜中に東通村や関根などから、〈お産だ！。産婆さん頼みます！〉と電話がかかってくると、よし！。分かった！それで、あんた旦那さんだね。馬っこさ乗って来なさい。急いでだよ！」

やがて、裸馬に乗った男が汗だくになって〈産婆さん！産婆さん！〉とやってくると、〈これからは私に任せなさい。その馬に乗ってあんたの家へ行くから、あんたは後からゆっくり歩いて来なさい

い！）（笑い）と言って、ポカーンとしている男から馬を受け取り、道具を詰めたリュックを背負ってヒラリと裸馬にまたがり、あっという間に闇の中に走り去るというわけです。「しびれますね（笑い）。まるで西部劇の女ガンマンでも見ているようなシーンですね（笑い）」。それで、家の人がついてこなくても目的の家までたどり着けるんですか？」「それは、馬の性質を知らない者の質問だね（笑い）。馬というのは自分の家を知っているんですよ。だから大利の誰それ、白糖の誰と聞くだけで大丈夫なんです。これは、こどもの頃、盛岡で何回も経験したことなんです。滝沢から馬に乗



って盛岡迄来て、馬を離してやると、ちゃんと滝沢の家まで帰ってくるんですよ」。

間違った習慣とたたかう

当時の青森県では、県病のお医者さんが「青森県の人には産婦を腸チフス患者と間違っているんじゃないだろうか？」と言われるほどお産に対する知識がなく、お産をした後、帆立の貝殻で味噌を焼いた「味噌かやぎ」だけを産婦に食

べさせていました。それでも、昆布や鰹節で、だしを取るならまだしもだが、多くはただ味噌を入れるだけだったのです。この「味噌かやぎ」とおかゆだけの食事を産婦は何日も取っていたのです。だから、お母さんの栄養が足りず、赤ちゃんが母乳を吐き出すということがよくあり、脚気になる者も多く産褥熱で生命を失う者も少ななかったのです。下北では、この状態が昭和三十年代になってもまだ続いていたのです。

「産人が魚を食べれば腹が腐る」と信じられ、「そんなことは、絶対にありませんよ」と、いくら産婆さんが言っても、「ここでは、昔からそうやってきた」と言って頑張るので、なかなかその習慣を変えることはできませんでした。だから赤羽さんたち下北の助産婦さん達は、赤ん坊を取り上げるだけでなく、これまで信じられてきた間違った習慣を直すという、面倒な「お産と保健学習」という仕事しなければならなかったのです。これは、なにも下北だけにあったことではなく医者や保健婦の居ない東北の農村では、ほとんど



が下北と同じ状態だったのです。「ちゃんとした知識があれば赤ちゃんも産婦も助かったのにという口惜しい思いを何度もしました」という赤羽さんは、汽車やバスが通るようになると馬をやめて自転車に乗るようになり、「足腰が弱くなってきたので」と言って、バイクを乗り回すようになりました。先日、青森市に住むA子さんが、赤羽さんを思い出して次のように語ってくれました。

「私の実家は田名部ですが、あれは、昭和二十年の七月でした。戦争も終わり頃でしたが、いつアメリカの飛行機が襲ってくるかと、私の父や母は毎日ビクビクしていたそうです。そんなある日、空襲警報がかかって、みんなが防空壕に避難することになったのですが、母が急に産気づいてしまったのです。こんな時に迷惑だと思ったのですが、赤羽さんに使いを出したら、〈戦争だろうが、飛行機が来ようが、赤ん坊は待っていないのだ〉と言って、電気のつかない真っ暗な部屋で赤ん坊を取り上げてくれました。元気な女の子でした、それが私だったのです。そして、私の子供も赤羽さんに沐浴をしてもらいました』

すごいですね。「どんな時でも最善をつくす」これが赤羽さんの生涯だったのです。

【編集後記…とは違いますが…】前回号にバタフライエフェクトに似た話として「100 番目のサル」について触れたところ、ある読者からその話を詳しく知りたいとの問い合わせがありました。そこで今回はあらためてお知らせします。私がこのテーマを最初に目にしたのは 40 年位前に吉永小百合さんがナレーターをつとめた短編アニメ『100 ばんめのサル』でした。ストーリーは人間社会を猿の世界になぞらえながら、核軍拡と戦争の愚かしさを訴えるものでした。日本の南の幸島。そこではいつもサルたちが、好物のサツマイモの奪い合いをしていた。ケンカの後のサツマイモは必ず砂の上に落ち、ジャリジャリして食べられない。だがある日、一匹のサルがイモを海に落としてしまう。海水で洗ったイモは塩味も利いておいしい。これ以降、若いサルたちは必ずイモを洗って食べるようになった。当初はこれを無視していたボスザルや老ザルもこれに続き、ついには島で最後の 100 匹目のサルも同じことを行なう。その時、陸を隔てた海の向こうでも不思議なことにこうした現象が伝播したという寓話です。後で調べたら 1986 年の国際平和年記念作品ということで直接的に声高に核の脅威を叫ぶのではなく寓話的に固定観念から脱して柔軟な思考の大事さを通じて、人類が何をなすべきかという壮大なテーマでした。あくまでも都市伝説らしいのですが心の奥に残った作品だった記憶があります。今、YouTube で当時の動画を検索しましたが残念ながら見当たりませんでしたが、短く切り取ったと思われる 2 分半程度の動画がありましたので紹介します。この QR コードで観ることが出来ます。(栗)

